会長退任にあたって

第 8 期会長　　東野　文男（東京農工大学）

平成１２年度の総会の議を経て、日本数値流体力学会会長の任を辞することになりました。この一年間をつつがなくその任を果たすことができましたことは、会員はもとより、偏に笠木伸英副会長をはじめとする運営委員の皆様方のご協力とご支援の賜ものと存じ、改めて厚くお礼申し上げます。

本学会は１９９２年４月６日から設立準備会が活動を開始し、同年 10 月 1 日に発足しました。設立の目的は数値流体力学の学際的・国際的な研究交流を助成し、またその普及・発展を図り、併せて数値流体力学者の親睦の場を提供することにあります。最初は 32 名の正会員からスタートしましたが、この 10 年間で会員数も 500 名を超えるようになりました。初代の会長には大島耕一先生が就任され、大宮司久明先生が副会長を勤められました。大島先生は現在でも欧文誌ＣＦＤジャーナルの編集と発行にご尽力頂き、学会の発展に多大な貢献をされております。また、大宮司先生は国際シンポジウムを主催されただけではなく、学会員の増強や経済的な面で多大なご支援を頂き、学会運営の基礎を築いて下さいました。このような先駆者の献身的な努力がなければ、日本数値流体力学会は今日まで存続しなかったかもしれません。

数値流体力学会が日本の学会としての市民権をえるためには、会員数、経済的基盤、および、会誌発行などの学会活動の充実が必要です。この 10 年間、歴代の会長とそれを支える各運営委員の方々は常にこれらのことを念頭に入れて努力してきました。本学会が主催する日本数値流体力学シンポジウムの参加者が約 500 名であることを考えれば、現在の会員数は第一の目標値に達したといえます。経済的基盤と組織の確立については東京大学生産技術研究所の小林敏雄先生（第 6 期会長）と村上周三先生（第７期会長）のご尽力により多くの問題が解決され、日本学術会議に委員を派遣することができるようになりました。私が会長を仰せつかりました第 8 期総会の議を経て本学会は組織・運営を一新し、学会としての体裁を整えることができました。

毎年 12 月に開催される日本数値流体力学シンポジウムは本学会が国内で主催するシンポジウムとして定着しております。また、国際的な研究交流活動として、国際数値流体力学シンポジウム、アジア数値流体力学シンポジウムなどに対して積極的に支援し、論文集の発行等に尽力してきました。特に、欧文誌である CDF ジャーナルの発刊は日本に限らず、アジア数値流体力学者の活動の場としても重要度を増してきました。しかし、１２月のＣＦＤシンポジウムで口頭発表された論文のうち数編しか欧文誌に投稿してくれないという事実は誠に遺憾です。日本数値流体力学シンポジウムで発表された論文の中からもっと多くの日本人

©日本数値流体力学会

の原著論文がＣＦＤジャーナルに投稿されるようお願い申し上げます。２１世紀に入り、第９期笠木伸英会長と久保田弘敏副会長の指導のもとで本学会がますます発展しますよう祈念しております。

©日本数値流体力学会